

# コロナ禍で高まる家族の健康への関心

— 一緒に過ごす時間の増加で知る家族の様子 —

主任研究員 北村 安樹子

今回の新型コロナウイルスの感染拡大にともなって、当研究所ではこれまでに計2回のアンケート調査を実施した。第1回調査は、全国に先がけて7都府県に緊急事態宣言が発令される直前の2020年4月3日～4日に、第2回調査はその後対象地域を全国に拡大した緊急事態宣言の一部解除が行われる直前の2020年5月15日～16日に実施した\*1。全国の20～69歳の男女1,000名を対象とするこれらの調査では、新型コロナウイルスの感染拡大にともなう回答者の生活や意識の変化についてたずねている。

本稿では、主に第2回調査の結果に基づき、4月以降に出された全国的な緊急事態宣言の下での回答者の在宅時間や家族と過ごす時間の変化に注目し、これらの変化が回答者の家族の健康状態に対する意識に与えた影響の可能性について考察する。

## <コロナ禍で増えた「自宅で過ごす時間」「家族と一緒に過ごす時間」>

第2回調査の結果、同居家族がいると答えた人のうち、緊急事態宣言が発令された4月中旬頃に比べ「自宅で過ごす時間」が増えたと答えた人（「増えた」「やや増えた」の合計割合）は68.7%、「家族と一緒に過ごす時間」が増えたと答えた人は60.8%を占めた（図表省略）。この調査が行われた5月中旬時点では、「自宅で過ごす時間」が減ったと答えた人（「減った」「やや減った」の合計割合）は5%に満たず、残りの約3割のほとんどは「変化なし」と答えている（図表省略）\*2。

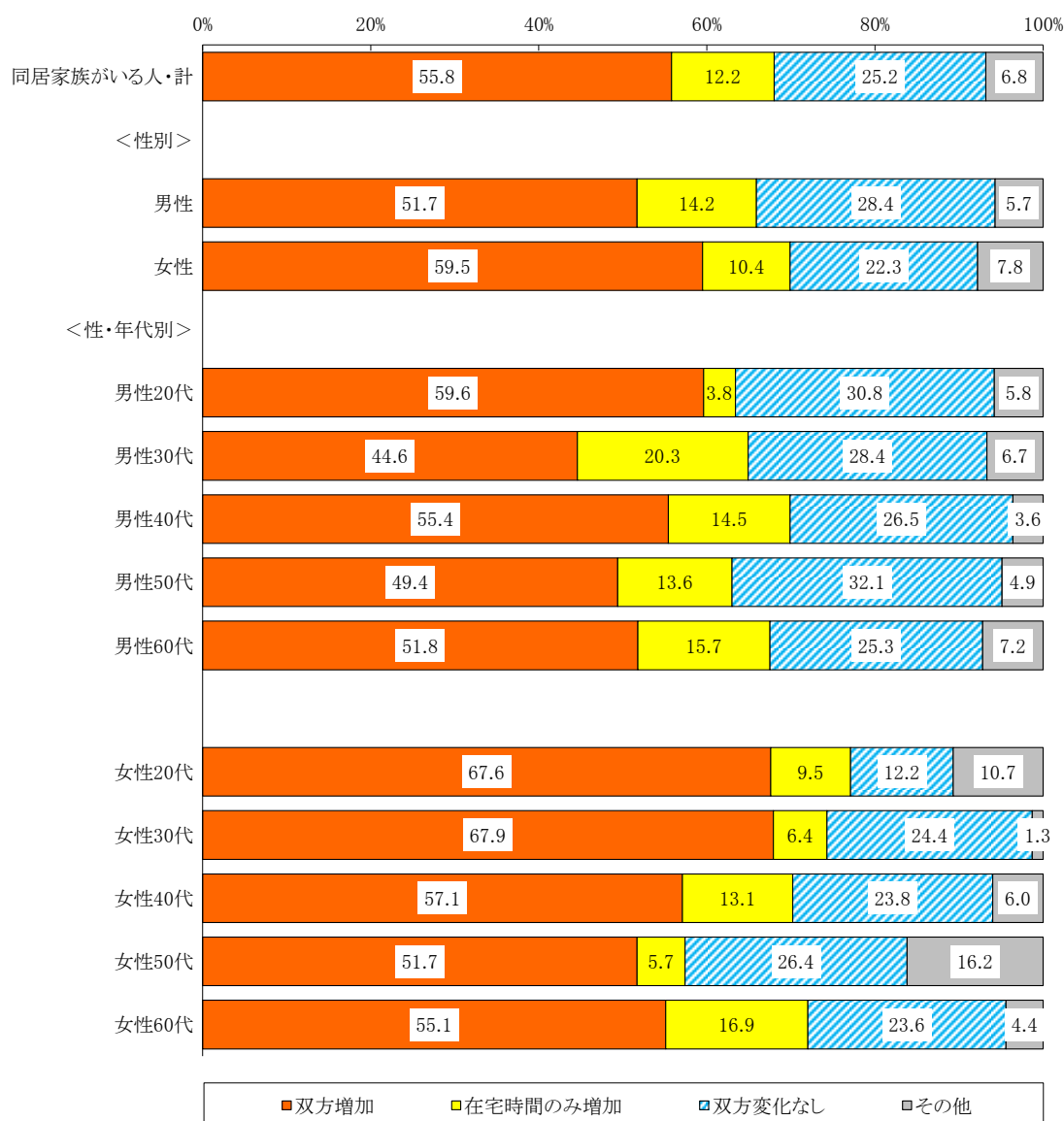
## <「自宅で過ごす時間」は増えたが、「家族と一緒に過ごす時間」は増えなかった人も>

では、「自宅で過ごす時間」が増えた人では、「家族と一緒に過ごす時間」も増えたのだろうか。この点を見るため、両者に関する回答状況を組み合わせると、同居家族がいる人のうち、4月中旬以降、「自宅で過ごす時間」と「家族と一緒に過ごす時間」がともに増えた「双方増加」の人は6割弱を占める（図表1）。

また、これに次いで多いのは、これらの時間についていずれも変化がなかった「双方変化なし」の人であり、3割弱となっている。一方、「自宅で過ごす時間」は増えたが、「家族と一緒に過ごす時間」は変化しなかった「在宅時間のみ増加」の人も1割強を占めた。同居家族がいる人のうち、最も高い割合を占めたのは「双方増加」の人であったが、そのような状況に該当しなかった人も4割近くを占めることがわかる。

なお、性年代別にみた場合、「双方増加」の人は20代男性と20～30代の女性で他グループより高く、6割弱～7割弱を占めた。

図表1 4月中旬頃に比べた「自宅で過ごす時間」と「家族と一緒に過ごす時間」の変化  
(性別、性・年代別)



注 : 調査対象は全国の20~69歳の男女1,000名。調査方法はインターネット調査。同居家族がいる人の回答を集計。  
 「自宅で過ごす時間」「家族と一緒に過ごす時間」の変化についての回答状況は、次の通り。  
 「双方増加」 「自宅で過ごす時間」「家族と一緒に過ごす時間」がともに増えたとした人  
 「在宅時間のみ増加」 「自宅で過ごす時間」は増えた、「家族と一緒に過ごす時間」は変化なしとした人  
 「双方変化なし」 「自宅で過ごす時間」「家族と一緒に過ごす時間」がともに変化なしとした人  
 「その他」 上記以外の人

資料 : 第一生命経済研究所「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」(2020年5月実施)

<一緒に過ごして感じた家族の様子>

では、「自宅で過ごす時間」や「家族と過ごす時間」がともに増えた人では、家族の健康に対する意識に関してどのような変化がみられたのだろうか。

そこで、先の図表1でこれらの時間がともに増えた人（双方増加）、「自宅で過ごす時間」は増えたが、「家族と一緒に過ごす時間」には変化がなかった人（在宅時間のみ増加）、いずれの時間にも変化がなかった人（双方変化なし）の3グループに注目し、家族の健康状態に対する意識を比較した。

その結果、家族の健康状態が以前より『よくわかるようになった』と答えた人（「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」）は、「双方増加」の人で7割強を占め、「在宅時間のみ増加」の人（44.8%）や、「双方変化なし」の人（34.8%）に比べ大幅に高い割合を占めた（図表2）。これらの人では、家族の様子を目にする時間や、家族とコミュニケーションをかわす機会が増えて、家族の健康状態を以前より理解できるようになったと感じている人が少なくないことがうかがえる。

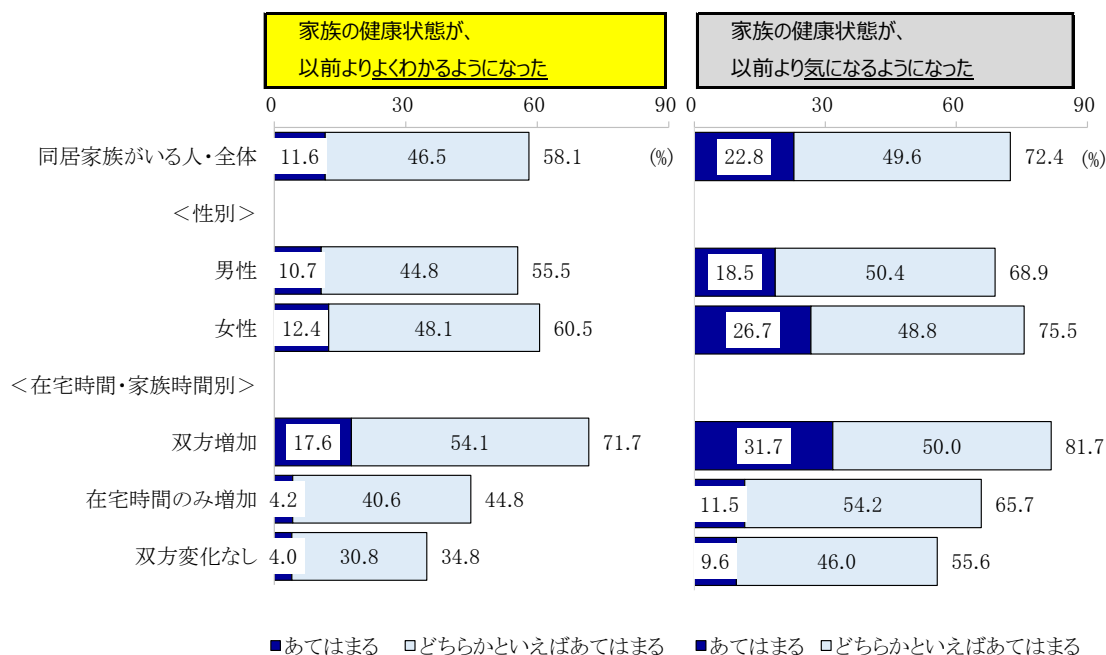
一方、「在宅時間のみ増加」の人では以前より『よくわかるようになった』と答えた人が4割強にとどまった。この割合は「双方増加」の人に比べ低い一方、「双方変化なし」の人に比べやや高い。自宅という同じ空間で暮らしていても、一緒に過ごす時間が増えなければ家族の様子や変化に気づくとは限らない一方、一緒に過ごす時間は増えなくても、同じ空間で暮らすことで家族の様子の変化に気づく場合もあるのかもしれない。なお、性別にみた場合、これらの変化はいずれも、男性に比べ女性で顕著にみられた。

### <コロナ禍で高まる家族の健康への関心>

また、「自宅で過ごす時間」と「家族と一緒に過ごす時間」がともに増えた「双方増加」の人では、家族の健康状態が以前より『よくわかるようになった』と答えた人を上回る8割強の人が以前より『気になるようになった』と答えた。これらの人では、家族と過ごす時間が増えたことで、家族の健康状態がわかるようになった結果、気になるようになったか、もしくは家族の健康状態が気になって、家族と一緒に過ごす時間を増やしたことで家族の健康状態がわかるようになった可能性があると考えられる。家族一人ひとりが感染予防に気をつけ、心身のコンディションを自律的に整えることの重要性とともに、自身が家族の健康に気を配る必要性を感じた人もいたかもしれない。

なお、家族の健康状態が以前より『気になるようになった』と答えた人は、「在宅時間のみ増加」や「双方変化なし」の人でも6割弱～7割弱を占めた。この割合は、「双方増加」の人の水準には及ばないものの、4月中旬以降、以前に比べ家族の健康が気になるようになった人が増えたことを示している。新型コロナウイルスの感染拡大や在宅時間の増加は、人々の生活や意識にさまざまな形で影響してきたが、家族の健康に対する人々の関心は、これからも続くと思われる。

図表2 同居家族の健康への意識(性・在宅時間・家族と一緒に過ごす時間の変化別)



注：同居家族がいる人の回答。選択肢にはこのほか「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」がある。設問文は『「緊急事態宣言」の対象地域が全国に拡大された4月中旬頃に比べて、以下のことはどの程度あてはまりますか』。<在宅時間・家族時間別>のカテゴリーは、図表1脚注を参照のこと。  
資料：図表1と同じ。

(ライフデザイン研究部 きたむら あきこ)

### 【注釈】

\*1 調査の方法や結果の概要は、以下のニュースリリースを参照されたい。

#### 【第1回調査】

「新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（後編）」

[http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2004\\_02.pdf](http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2004_02.pdf)

#### 【第2回調査】

「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（つながり編）」

[http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005\\_05.pdf](http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_05.pdf)

\*2 これらの結果については\*1【第2回調査】のつながり編（p.2）で紹介している。

\*弊社ホームページの「新型コロナウイルス意識調査特集ページ」にてこれまでに実施した調査データや関連レポートを公開しています。

[http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=v\\_year](http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=v_year)